

# バンテアイ・クデイ前柱殿東南小堂（C10） 東部における出土蔵骨器について （第60次調査出土資料）

大阪市教育委員会事務局  
宮本康治

## はじめに

2019年8月に実施した第60次調査では前柱殿東南小堂（C10）付近を対象とし、隣接する建造物との関係や下層の状況などについて調査を行った。その中で近現代に属する時期の蔵骨器と関連遺物を含む落込みが検出され、遺物の一部を取り上げ記録作成等を行った。本編ではその状況について概観するとともに確認された蔵骨器について資料紹介、検討を行う。

## 1. 出土遺構とその概況

調査区の北東隅に近いところで蔵骨器等が納められた埋納坑が検出された。前柱殿東南小堂（C10）基壇の東端部である。落込み東側は調査区外に延びており、全形は不明だが検出された範囲では不整形な円形を呈するようである。調査区にかかるところでは南北1.1mほどの規模である。深さは検出した第4層の上面からで0.3mほどである。

## 2. 検出蔵骨器と関連資料の概要

調査した範囲では調査区壁面で確認したものも含めて15点あまりの蔵骨器および関連遺物が検出された。落込みは調査区外に広がっており、全体ではさらに多くの容器等が埋納されていることが推測される。検出した範囲での概要を見ておくと、南北0.6m、東西0.3mほどの範囲に分布し、上下関係はあまり明確ではなく近接した高さで検出された。いずれの容器もほぼ正置状態を保っており、また容器が大きく破損したりした状況も認められなかったことが注意される。

検出した遺物の内訳は青花あるいは色絵等の可能性がある磁器類の鉢が2点、不明陶器の鉢が1点、蓋の伴う鉢が2セットつまり蓋と身で計4点、土器かとみられる破片が1点、金属製の蓋の伴う脚付の容器1セット2点、ガラス瓶が5点等である。

以上のうち2件（3点）を取り上げ、記録作成を行った。取り上げた2件も含め、調査終了時には埋め戻している。

## 3. 図化資料の概要（図1、写真1～4）

図化を行ったのは先述したもののうち北寄りで見出した陶器製の蓋付鉢1セット2点とガラス製瓶1点の計3点である。それぞれの概要を記していく。

図1-1・1-2、写真1・2は施釉陶器で、蓋を伴う脚付の鉢である。共通する点を見ておくと、双方ともロクロ成形によるとみられ、無釉の部分は明黄橙～灰白色、施釉部分は黄褐～褐色を呈し、胎土は精良で焼成は良好だがやや軟質である。もともとセットとして焼成されたかは不明で

あるが、釉調は類似している。

蓋は上端を一部欠くがほぼ完形で、丸みのある高い器形である。身と合わせるかえりがつき、外面上端に鈍い段がつく。最大径8.9cm、かえりの下端で口径7.6cm、残存高4.7cmである。外面側は施釉され、蓋の下端から内面側は無釉である。

脚付の鉢状を呈する身側は、丸みのある器形に末広がりの脚部が続く器形である。口縁部は内傾する。脚部は外傾し端部は断面に丸みをおびる。底面は外周側のみが接地する。器高11.4cm、体部の最大径で12.5cm、口縁上端部で9.2cm、底径8.5cmである。口縁上端から内面側および脚部下端が無釉で、それ以外は施釉される。内部は火葬骨が口縁よりも高い程度まで納められている。骨を取り出しての観察は行わなかったので内面側の観察はできていないところがある。

図1-3、写真3・4はガラス製の瓶で、ビール瓶の可能性がある。口縁端部は断面が丸みをおび、その下位で外側に肥厚する。鈍い段の下に縦方向のしわ状の痕跡がある。器高17.5cm、胴部径7.2cmである。黄褐色を呈する。外面側の肩部、外面下端、底面に陽刻の文字等が見られるところがある。外面肩部(図中a)に「33□C□」とあり、容量等を示す可能性があろう。外面下端(図中b)には「BRASSERIE KHMER」とあり、生産地や醸造所等を示す可能性がある。底面には(図中c)不明の文字があり、それに続き「CA□□」および数字の「1」とあるようだが、不明瞭で判読しがたい部分がある。

このうち、前者の蓋付鉢は火葬骨が納められ、蔵骨器であることが明らかである。付近の墓地資料での例や聞き取りからは、火葬骨を納めるための専用の器であると推測される。また今回検出したものの中にはほぼ同型の容器がもう一組あることが注目される。一方、ガラス瓶については容量や文字の状況からビール瓶の可能性があるが、年代等の詳細は明らかにはできていない。近現代の慣習においても火葬骨を納める際に水を供えて供養することが知られており、そのための容器であることが推測される。

#### 4. 検出蔵骨器資料の位置づけ等について

遺構全体の状況からまずみると、これらは近接して検出されてはいるが、埋納が単独かどうか容器のセット関係等は明確にはできていない。ただし不定形な落込み内でまとまって検出されており、高さも近接しいずれも正置された状況を保ち、乱された状況ではなかったため、幾度も掘り返され埋納されたとみるより、ある程度まとまって埋められたとみるほうが妥当であろう。

次に含まれている容器には大きくみて蔵骨器とみられるものと瓶があるが、近年の慣習についての聞き取りなどからすると、火葬骨を納めた蔵骨器と、それと水を供える瓶等をともにおく形が知られることから、今回検出されたものもそうした葬送儀礼に伴い、セットをなしていた可能性があろう。またその中でも蔵骨器に用いられている容器には今回図化した蓋の伴う陶器の他、金属製の蓋付容器、陶磁器の碗あるいは鉢を用いるものなど多様なものが認められた。陶器および金属器のものは現代の寺院等で見られた類例からみて専用のものと考えられる一方、碗・鉢形のものには転用された可能性もあろう。容器の種類等に時期的な推移があるか、また確認された容器の産地や由来等は今後の課題となるであろう。なお、遺構そのものの年代については蔵骨器で近年まで見られる器形が含まれ、ガラス製瓶では時期は不詳なもの古くさかのぼるものではないことなどから近現代でもかなり現代に近い時期に下る可能性があるのではなかろうか。

なお、今回の調査では近現代の状況も本遺跡のもつ性格の重要な手がかりと考え、取り上げて図化等を行った。そして、作業終了時には埋め戻して簡単な供養も執り行った。地域の人々の感情に十分慮しながら調査を進めることも求められよう。

〈参考文献〉

丸井雅子・ニム・ソテイーザン・宮本康治（2021）「バンテアイ・クデイ第60次発掘調査概報—前柱殿東南小堂C10（いわゆる上座仏教の「仏教テラス」）および小塔C19での発掘調査—」『カンボジアの文化復興』31、上智大学アジア人材養成研究センター、149-166。

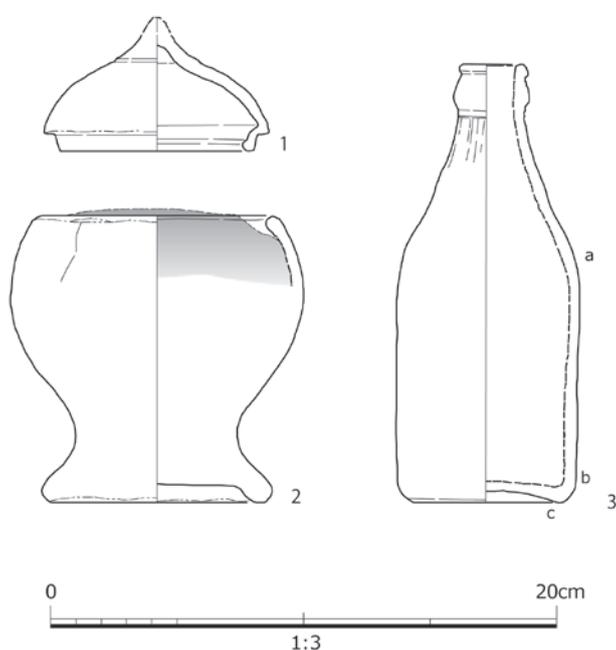


図1 出土遺物実測図（1, 2：陶器製蔵骨器、3：ガラス製瓶）  
Fig. 1 Drawings of excavated artifacts (1, 2: ceramic funerary urn, 3: glass bottle)



写真1 陶器製蔵骨器（組み合わせた状態）  
Ph. 1 ceramic funerary urn (combined state)



写真2 陶器製蔵骨器（外した状態）  
Ph. 2 ceramic funerary urn (separated state)



写真3 ガラス製瓶  
Ph. 3 glass bottle



4-1 肩部の「33□0□」  
4-1 “33□0□” on shoulder



4-2 外面底部の「BRASSERIE KHMER」  
4-2 “BRASSERIE KHMER” on lower end



4-3 底面の「CA□□」等  
4-3 CA□□ on the bottom

写真4 ガラス製瓶の陽刻文字  
Ph. 4 embossed letters on the glass bottle